思いやりの気持ちがもたらす弊害

── なぜわたしたちはインクルーシブ教育に消極的なのか ──

○池内はるか[1]・橋本博文[2]・＃佐藤剛介[3]
([1]安田女子大学大学院文学研究科・[2]安田女子大学・[3]名古屋大学)

問題

近年，共生社会の実現をめざし，従来の分離教育や統合教育からインクルーシブ教育への転換が進められている。しかし，三好（2009）が指摘しているように，分離教育の根拠となる法の残存や特別支援学校の増設および入学者増加など，インクルーシブ教育への転換とは逆行した動きも見られており，現状ではインクルーシブ教育の理念と現実に乖離があることがうかがえる。本研究では，人々が分離教育，統合教育，インクルーシブ教育をどのように評価しているのか，またそうした評価に対しては障がい者へのいかなる態度が影響を与え得るのかについて検討した。

方法

調査対象者と手続き　大学生 204 名（男性 45 名，女性 158 名，性別回答なし 1 名）を対象に質問紙調査を実施した。分析に使用した項目は本研究独自に作成した以下の項目であり，いずれも 7 件法で回答を求めた。

1)「インクルーシブ教育」,「分離教育」,「統合教育」の 3 つの教育のあり方（各教育の定義は仲宗根・韓（2015）を参照した）に対する評価を尋ねる項目（計 12 項目）

2)障がい者への態度を測定する項目(計 30 項目)。

結果

3 つの教育のあり方に対する評価および障がい者への態度に関する尺度の信頼性・妥当性の検討を行った。探索的因子分析の結果，各教育に対する評価を尋ねる項目群については，因子負荷量の低かった各教育の現実性を測る 3 項目を除き，9 項目としたうえで「インクルーシブ教育に対する賛意」,「分離教育に対する賛意」,「統合教育に対する賛意」の 3 因子解を採用した（αs>0.85）。また，取り除いた各教育の現実性を測る項目はそれぞれ単項目で分析に使用することとした。障がい者への態度を測定する項目群については因子負荷量が低い項目等を取り除いたうえで，「心理的距離」,「過度な平等意識」,「肯定的態度」,「予防的やさしさ」の 4 因子解を採用した（αs>0.57）。

次に各教育に対する賛意および各教育の現実性について，各教育間での得点を比較するためにそれぞれ 1 要因の分散分析を行った（Figure.1）。その結果，賛意については，分離教育がインクルーシブ教育と統合教育のいずれと比較しても得点が有意に高かった（F（2,402）=6.58，p<.01）。また，現実性については，分離教育がインクルーシブ教育，統合教育いずれと比較しても得点が有意に高く，統合教育はインクルーシブ教育よりも得点が有意に高かった（F（2,404）=120.56, p<.001）。

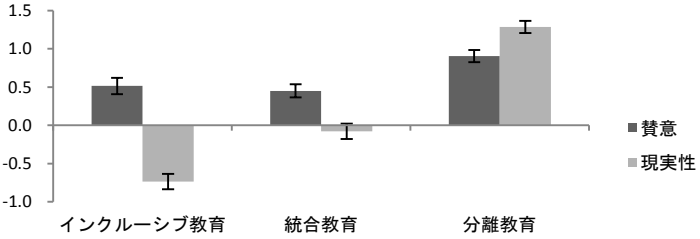

Figure.1　各教育に対する評価

注）縦軸はそれぞれの教育のあり方に対する賛意および現実性認知の得点を示している。-3（反対・現実的ではない）から 3（賛成・現実的ではない）の値をとる。

各教育に対する賛意を目的変数，障がい者への態度を説明変数とする重回帰分析を行ったところ，統合教育に対する賛意には肯定的態度が正の影響を与えており（β=.16，p<.05），分離教育に対する賛意には予防的やさしさが正の影響を与えている（β=.16，p<.05）ことも明らかにされた。

考察

本研究の結果はまず，調査対象者がインクルーシブ教育や統合教育に比べ，分離教育に対して高い賛意を示すこと，そしてインクルーシブ教育の実施については現実的に困難であると評価していることを示していた。また，予防的やさしさ――障がい者を傷つけたくないといった思いやりの気持ち――が分離教育への賛意につながっていることも明らかにされ，分離教育が必ずしもネガティブな側面のみで評価されているわけではないこともわかった。この結果は示唆に富むものであり，消極的に受け入れられているインクルーシブ教育への転換を推し進めていくにあたって，上記のような障がい者に対する思いやりの気持ちを考慮する必要性を示すものである。